64

『素問』『霊枢』における三焦概念の変遷

林　　孝信
日本内経医学会

緒言

古来より，三焦とは何かということについて様々な説明が試みられているが，今日に至るまで理解しにくい存在となっている．本論は『素問』『霊枢』にある用例をもとに，三焦の概念を2つの類型に分類し，原義と構造を明らかにしたうえで，その変遷をたどることを試みる．

初期の三焦

『素問』『霊枢』には「大腸小腸膀胱三焦」などと蔵府名が連続した文章がある．これは大小と同様に膀胱と三焦も，意味の反する語を並べているものと考えられる．語源的には，膀胱に膨張の意があり，三に集約，焦に収縮の意味があるとされる．つまり膨張に対する収縮が三焦の原義であろう．膀胱で尿を溜め，三焦では排尿を調節すると考えていたようだ．

三焦の病証を言う文章では「小便するを得ず」「実すれば閉癃し，虚すれば溺もれる」などと排尿調節に関わる．また「膀胱滲み得ざるは下焦脹る」「下焦溢れるは水をなす」の下焦もこの三焦と同じものであろう．膀胱の病証にも「約（しま）らずは溺もれをなす」「約りて通ぜず水道に行かず，故に癃す」とあり，この約るも排尿調節のことである．

このように三焦は，膀胱に連続し，収縮して排尿を調節し，また下焦とも表わされた．本論では以上の三焦を「三焦a」と名付ける．

営衛生会篇の三焦

『素問』『霊枢』では，焦をこげる，かわく，やつれるの意味で用い，皮膚・毛髪・顔などの体表面の状態を示す．

『霊枢』営衛生会篇以前の生理学とされる『素問』経脈別論では，水穀が胃に入り，精気や濁気が様々な気に変化して，皮毛や脈や蔵府に行くことを論じる．それが後代になると，濁と精（清）が営と衛に替えられていったと考えられる．

営衛生会篇は営衛の生成を論じるが，衛気が皮膚分肉之間をめぐることと，焦が皮毛腠理の乾燥ややつれることからイメージが重なったのだろう．焦より営・衛が生成されるとみて上焦・中焦の語をあて，以前からあった三焦aは名称を変更して下焦としたのである．

これにより営衛生会篇では，全身を周還する衛気の生成は上焦から，経脈を行く営気は中焦から，そして小便は膀胱と下焦からとして，この3つを総称したものも三焦と言ったのである．この新しい三焦は，泌尿器の三焦aとは異なる概念であるので，「三焦b」と名付けることにする．

以上にみた三焦aと三焦bは，次のようにまとめることができる．

・三焦a：膀胱に連続する泌尿器で，しめる機能をもつ．原義の三焦．後の下焦．
・三焦b：営衛を生成する上焦・中焦と下焦の総称．新しい広義の三焦．

このように三焦をaとbに分けることにより，bはaを包含する構造であったことが導きだされる．

十二経の三焦

『霊枢』経脈篇などの十二経を論じる篇では，三焦は十二蔵府のひとつとされる．しかしこの十二蔵府には，所属する経の病証は記載されるが，蔵府としての病証がほとんどない．三焦についても手少陽経の流注に関する病証はあるが，泌尿器に関する病証がない．つまり蔵府としての機能が不明確なため実体としての存在も疑われて，のちに『難経』でも「名が有って形が無い」とされることとなったのである．

結語

以上のように『素問』『霊枢』にみえる三焦には，①膀胱に連続する排尿調節器官，②営衛を生成する上焦・中焦と下焦の総称，③機能の不明確な名称だけの蔵府，と変遷していった過程をたどることができる．